慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	地理学の課題と領域に就いて
Sub Title	Subject and field of geographical studies
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.12 (1953. 12) ,p.969(1)- 984(16)
JaLC DOI	10.14991/001.19531201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地理學の課題と領域に就いて

小島榮次

はしがき

近頃わが國の地理學界に、地理學の本質に關する諸問題卽ちその研究目的及び領域などに就いての再檢討を志す人々が多い。例えば富田芳郎氏の「研究目的から見た地理學分科の研究對象に就いて」（人文地理、第三卷第二號、一九五一年）渡邊操氏の「地理學の再認識」（地理學、第一卷第二號、一九五三年）松井武敏氏の「地理學の性質に關する抄論」（人文地理、第四卷第三號、一九五二年）川喜田二郎氏の「地的均衡論」（地域、第六、七、八號、一九五二―三年）等はその論文の主なるものであろう。そこで私もこれ等の論文に倣つて地理學の課題及び領域に就いての所見を述べ、讀者諸賢の敎示を仰ぎたいと思う。川喜田氏は「事實最近の地理學の雜誌のどれでもを手にとつてみると、（地理學評論、新地理、人文地理など）ただにそのテーマが從來同樣に多岐多樣にわたつているばかりでなく、その扱い方において、歷史學やら社會學やら民族學やら區別のつかぬものが數々ある。（中略）戰前派の地理學徒は、いかにして地理學固有の領域を守らんかと苦心しているのに對して、戰後派のそれは、むしろ隣接諸科學との境界的領域に好んで進出し、そこにむしろ地理學の若がえりを求めようとする。（中略）隣接諸分野の場合には、それぞれの分野の內部における『流れ』というものがあり、いわばその學問の內から盛り上る學問的理論的要請として他分野との境界がくずれよう

としているのに對して、地理學の場合にはそのような主體性からではなく、その時々における他分野の流行的傾向たとえば歴史學を中心とする歴史主義的方法論や社會經濟史學の流行、さては最近の人類學や生態學の流行に受動的に反應して『色目を使つている。』という酷評もできなくはない。」（前掲論文、三頁）と云い、實用主義を尊重して「中途半端な學問至上主義を粉碎する」（同四頁）ことに贊成される。從つて隣接諸科學の分野にも積極的に進出することがよいとされるが、その場合に必要な地理學の主體性を確立する理論として、「地的均衡論」を提唱されるのである。

私には氏の如くわが國現在の地理學を批判する自信がないが、普通には隣接諸科學の分野に屬すると思われるような研究に手をつけるのをあながち愼しむべきこととは思わぬこと、但しその場合にも地理學の理論を持つていることが必要と思うことでは、氏と似た考えを持つて居る。然し乍ら私は、「地的均衡論」にせよ何にせよ一つの理論を持つて、古い地理學という殼からとび出して行くことには贊成しない。しかも私から見ればこの古い殼は非常に立派なもので、その存在は人間の福祉に大きな貢献をして居ると思うのである。

一　地理學研究の課題に就いて

私は嘗つて小著「經濟地理學序説」（昭和一五年、時潮社刊）の中で、地理學的研究の課題を地域的個性の記述及び説明にあるとした。これは地理學の生れて來る根本的な出發點を考察することから到達した結論であつて、ひとが地表の部分々々に對して關心を持つのは、それ等地表部分の間に諸種の相違があり、しかも各部分の特殊性は持續性・固定性を持つという事實を認めるからだと考えたのである。地表各部分が持つ特殊性は、もちろん變化するのではあるが、或る期間持續し、その間はその地表部分に生ずるすべての現象に對して重要な關係を持つという理由で、ひとが關心を持たずには居られない。斯かる關心から出發する研究は、地表の部分々々を個體として知ろうとするのであつて、結局地域的個性の記述及び説明がその課題となると結論したのである。何となればこの特殊性は、その地表部分の諸現象の分布狀態が、何等かの事情によつて等質性を持つことの結果として生じて居るのであり、この等質性の及ぶ範圍を地域と云い、地域の個性の記述及び説明を次々と行つて全地表を蔽うことが、地理學の目標となるのである。

今でもこの考えは誤りではないと思つて居る。地表の各部分を眞に知るということがそのそれぞれの個性を知ることに他ならないと考える以上は、個性の記述及び説明ではなしに、唯〻單に地表を記述し説明することを以つて地理學的研究の課題とするわけにはいかない。もちろん、各地域の個性を問題にせずに唯〻地表を記述し説明するだけでも、それを正確且つ十分に行おうとすれば、實に非常な大きな仕事であつて、それだけでも十分に學問として成立するような困難さがあり、また特殊な研究方法を必要とすると云えるであろう。地域的個性の記述は一層困難な仕事であり、ましてや正しい十分な説明となれば更に一層困難である。然し乍らこれ等の事實があつても猶、地理學的研究の課題は、地域的個性の記述と説明であるとすることが正しいと思う。蓋し前述の理由によつて、これが地理學的研究の正しい課題と考えられるからであり、たとい困難ではあつても、この目標に到達するよう努力を拂うべきだと考えるからである。そしてこの地域的個性の記述及び説明にせよ、單なる地表のそれにせよ、前述のような人間の最も普遍的な欲求に應ずるものであり、それが十分に行われると否とは人間の福祉に重大な關係がある。

次に、地理學的研究の課題を所謂地人相關の研究にありとする人々の中には、實は地表各部分の個性乃至特殊性を認め、それに對して環境との相互關係を考察することから説明を與えようとするものもあると解される。そしてその限りでは、事實上右に述べたと同じ課題を果そうとするものと見ることができる。然し乍ら元來地人相關論は、地人

相關の研究それ自體を目的とするものであり、從つて前述したところと異なる課題を持つものである。また環境論的立場をとる現代の地理學者として最も優れた代表者であるGriffith Taylorはその近業Urban Geography. A Study of Site, Evolution, Pattern and Classification in Villages, Towns and Cities. London, 1949. の卷頭に、「地理學者の特殊な研究領域は、人間とその環境との間の關係を說明することである。一世代の間この關係の緊密さに就いて論爭が行われ、地理學者は二派に分かれて對立した。可能論者はこの關係の人間的側面を强調し、決定論者は環境的要因を强調する。著者は後者の派に屬し、三つの型の人間集團に就いてこの關係の評價を行うため多くの研究を續けて來た。これ等根本的な型は卽ち人種・國民・都市である。」（三頁）と云つて居る。卽ちこの著者は地理學を「人間とその環境との間の關係を說明する」ものとし、地表部分を取上げるよりは、人種・國民・都市などの人間集團を取上げて、その環境との關係を研究して居るのであつて、前述のような地表の記述乃至地表の部分々々の個性の記述及び說明ということとは、かなり離れて居るように思われる。もちろんこの著者には濠洲の國土を記述し環境論的說明を與えたAustralia. A Study of Warm Environment and their Effect on British Settlement. New York.という名著もあるが、主著は右の三つの人間集團を一つ一つ取扱つた三部作であろう。

環境と人間との關係を研究する立場は、テイラー教授のように自然環境から人間への關係を觀察するもの、自然環境と人間の相互關係を注目するもの、自然環境の他に社會環境を重要視するものなどに分れるのであつて、川喜田氏の「地的均衡論」は地人相關の結果兩者の間に一種の均衡が生じて居るという考え方であるが、すべてこれ等の立場は、人間と環境との關係を研究するものであり、所謂人間生態學に屬して居る。卽ち地理學と呼ばれると同時に人間生態學とも呼ばれるのである。地理學をもつて地域的個性の記述及び說明を行おうとするものと考える立場と一應は離れて居り、非常な誤りをおかしたこともあるが、人間生活の研究に對して非常に重要な貢獻をして來たことも認められねばならない。元來、人間と自然環境との關係及び社會環境との關係は、人間生活に極めて重大な役割を持つのであるから、そしてまた地域的個性の說明はこれ等の關係の中にも求められるのであるから、環境論的研究乃至地人相關論的研究は、今後も學界に重要な地位を占めることは疑いない。地表を記述する立場乃至地域的個性を記述する立場と、環境論的乃至地人相關論的立場とは、昔から兩者相對して地理學の二つの大きな流れを作つて來たのであり、現在のわが國でこそ前者が優勢であるように思われるが、これからも恐らく一つの流れに合することはないであろう。だから私は、あながち環境論的立場を否定するものではないが、しかも前述の理由によつて、地域的個性の記述及び說明を地理學の課題とする立場をとる。

ところがここに第三の立場として、「地理學は地域の構造を具體的に把握し、究明する學問である」とする說がある。（松井武敏氏、前揭論文、一七九頁）これは地表を記述するという見地から地域を取上げるのではなく、地域の構造をそれ自體として研究の對象とするもののようである。歷史學と地理學とを「具體的科學」とし、他の「現象論的科學」及び「組織論的科學」から區別すると共に、「具體的科學」のうち「時間的科學」が歷史學、「空間的科學」が地理學であるとするのであるが、しかも地域は地理學が「實驗的檢證の操作」を行う場であると考える。そして「そのような場として、最もよく選ばれるのは、特殊性を持つ地表である。それは、このような地表において、地域構造が最もよく露呈されているからに外ならない。」（一三〇頁）と云う。地表を記述するに當つて、最も完全な意味での記述を行う目的から地域的特殊性乃至個性を求めるというのではなく、特殊性のある地域を地域構造を明かにするために取上げるのである。

これは私の考え方から見れば、地表を記述し説明するという地理學の中心課題、更に嚴密に云えば地域的個性の記述及び説明を行つて全地表を記述し説明するという仕事から離れることになる。然し乍らこの仕事も、前に擧げた第二の立場即ち環境論的乃至地人相關論的研究と同樣に、地表記述の仕事の一部分として行われ得るのだから、（本稿第三節第四節參照）環境論的乃至地人相關論的研究それ自體を地理學的研究と看做す立場をあながち否定しないと同じ理由で、この第三の立場も否定しない。唯々これが第二の立場の研究と異なる點は、比較的に新しく地理學者の關心の對象になつたという事であつて、政治上・經濟上その他の方面において一社會の目的を推進する上に、地區編成を適當に行うことの必要が強く認められて來たという實踐的要求と關連するものであり、所謂地域主義なるものの政治・經濟その他各方面での勃興に關連するものである。或る地理學者は、この動きが地理學を今までの深い眠りから呼び覺ましたとさえ云つて居るくらいである。（Griffith Taylor (Ed.), Geography in the Twentieth Century. New York and London, 1951. Ch. XV, Geography and Regionalism, by E. W. Gilbert. p. 346）

このように新しい事であるので、地理學者のこの動向が果して斯學に對し或は學問一般に對して如何なる寄與をなし得るかに就いては、まだ第二の立場に立つ研究の場合程明かではない。然し地表を記述する立場の地理學が各地域の構造を研究する方が、恐らく成果が大きいのではないかと思う。少くとも他地域との關係を考察する上に於いて、より十分な仕事が行われるであろう。

いずれにせよ私は第一の立場をとるものであつて、その立場から更に地理學的研究の領域に就いて述べてみたいと思う。

二　地理學的研究の領域

地域的個性の記述及び説明とはどんな仕事をすることであろうか。それは地表各部分の諸現象の分布狀態を觀察して、そこに各地域の個性を見出しそれを記述し、更にその分布狀態を、その地域内の諸現象の間の地緣關係を觀察することによつて説明することである。環境論的乃至地人相關論的研究は、この説明の一方法であるし、地域構造の究明は地域的個性記述の作業の一部ともなるし、説明の仕事の一部ともなる。地域的個性は諸現象の分布狀態から生じて居るものだから、説明とは結局分布狀態の説明に他ならない。そして地表の特定部分に特定の分布狀態があるのは、諸種の分布現象が地緣關係によつて、換言すれば空間的に相接觸することによつて互いに何等かの關係を持つということから生じるのである。そしてこの地緣關係から生じた何等かの等質性の顯著なものがある場合、それが特殊性乃至個性として認められ、その等質性の及ぶ範圍が地理學上の地域と呼ばれるものとなる。もちろん諸現象の分布狀態は地緣關係からのみ決まるとは云えない。それぞれの現象の基本的屬性が地緣關係の仕方を基本的に決めることは云うまでもないことである。例えば高溫と多量の水分とを必要とするという稻作の基本的屬性は、稻作と周圍の事情との關係を基本的に決める。だが分布狀態の説明は、地緣關係が例えば化學作用における重合とか分解とか複分解とかと同樣な過程を諸現象の間に生ぜしめて諸現象の分布狀態を決めることを觀察しなければ、全くこれを行うことができない。（註一）

註一　私は拙著「經濟地理學序説」で、個性の説明は、環境との關係の觀察によつて行うべきだと書いた。然し乍ら現在はこれを右のように改める必要を認めて居る。と云うのは、分布狀態が地緣關係にある諸現象との關係の結果決まるとすれば、その地緣關係

にある諸現象を環境と云つてもよさそうであるが、それは環境という概念を獨善的に餘りに擴大した用法だと思われるからである。もともと環境と云えば生物學上の概念であり、生物に對するものであつて、その現象が生物に關するものである限り間接には生物に對する環境となるけれども、地域的個性を形成する現象は必ずしも生物に關するものと限らない。元來、地理學には自然地理學と人文地理學とがあり、それに對して Maurice Le Lannou やその他の人々と共に、人文地理がとりも直さず地理である、即ち「人文地理は短く地理と呼ばるべきであつた」（La Geographie humaine, 1949. 古野清人譯、白水社、一九五三年刊、三三頁）と考えたいのであるが、少くとも人間の全く居住して居ないか或は居住者の極めて少い地域の個性は、是非とも自然現象の分布狀態のうちに見出されるであらうから、やはり人文地理が直ちに地理とは云い切れない。して見ればこゝで環境と云う言葉を用いるなら、場合によつて無生物に關する現象の分布狀態に對するものであることも生じる。

尙、右のような地緣關係にある諸現象の中には、物理的・有形的にその場所に分布するものばかりでなく、他地域との間の特定の固定的な關係、例えば生產物に對して他地域から安定した需要が恒常的にある場合の如く、無形の然し乍ら固定的な要因も含まれる。何となればこの場合われわれにとつて重要なのは、「關係」なのであつて、よしんばその場所に物理的に分布しなくても、固定的な「關係」がそこに分布して居ることは、物理的に分布する現象と同じように地緣關係にあると云うことができる。

然し地緣關係にあるすべての現象の間の關係が殘りなく觀察されねばならぬかと云えば、そうではない。浮動的・臨時的なものを除いた恒常的・持續的なものの間の關係だけを觀察すべきである。近頃動態的な研究の要が地理學者の間にも主張されては居り、斯かる研究の有用性は認めねばならないにも拘らず、先ず本則として恒常的・持續的なものの間の關係のみを觀察する。

も一つ序に述べて置きたいのは、環境論的觀察が斯かる地緣關係の部分々々を說明する場合があるということである。即ち地緣關係の一部分をとつてみれば、環境とそれに圍まれるものとの關係に他ならないものがある。前に環境論的乃至地人相關論的研究が地域的個性を說明する一方法であると云つたのはこの理由による。

ところでこの地域的個性の記述及び說明は、究極的にはその地域の自然及び人文現象の全般にわたる觀察の結果行われるべきものと考える。自然現象のみに就いての研究を行う自然地理學と人文現象のみについての人文地理學との二者を別々に認める人々も多く、また人文地理學卽ち地理學と考える人々も居るが、私は地理學は一つであり自然地理學と人文地理學はその部門であると考えたいのであつて、これも拙著「經濟地理學序說」に述べて置いたし、田中啓爾教授の「地理學の本質と原理」（古今書院、一九四九年刊）第一一章にも富田教授の前揭論文にも同樣な見解が述べられて居る。從つて對象とする地域的個性は自然現象・人文現象の兩者にわたることがあり得る。この仕事は非常な量の仕事であり、また極めて難しい仕事である。また、自然地理と人文地理とを別々のものと考える人々にしても、自然現象全般或は人文現象全般を觀察して、自然地域或は人文地域の個性を記述し說明することが、既にやはり難しい仕事である。だから部分的な研究が行われる。人文地理で云えば經濟上の個性を持つ地域の研究とか、或は集落形態の上で個性を持つ地域の研究とかが行われ、或は更にその中の細い部門に就いての研究が行われるし、自然地理に就いては、氣候上の個性ある地域の研究とか、地形上の個性を持つ地域の研究とか、或は更にその中の細い部門に就いての研究が行われる。若し組織的に行われるなら、これ等の特殊研究は相合して地表全體の記述及び說明となり得るものである。

これ等部分的研究の中には、事實上他の諸學問の研究と類似するものが生じて來る。例えば經濟上の地域的個性の研究は、經濟學上の研究の一部として行われることがある。後者の場合、地理學的な研究意圖卽ち地表を記述する仕事の一部として研究するのとは違い、經濟學上の何等かの研究に資するために行われる。然し乍らその部分的研究だけを見れば、それが經濟學的研究でもあり同時に地理學的研究でもあると云い得るようなものが恐らくあると思われる。例えば Frank C. Pierson, Community Wage Patterns. Berkeley and Los Angeles, 1953. は、ロスアンジェルス市を主たる例として、各種勞働者の賃銀の比率・賃銀の動きが都市を異にするに從つて特殊の地域的な型を

成すことを示そうとしたもので、經濟學的な研究であると同時に、地理的な問題を取扱うものでもある。そしてこのような場合は、社會學・民族學などの研究に就いても特に多いようである。地理學者はこれ等他學問の成果をも利用する。例えば Max. Sorre, Les Fondements de la géographie humaine. Tome I: Les Fondements biologique. Essai d'une écologie de l'homme. Paris, 1947. は、驚くべき多數の醫學上の研究を利用して疾病の地理を述べて居るという。（地理學評論、昭和二六年一月號、辻村教授の紹介による。）

斯くの如く部分的な研究には他學問の研究と區別し難いものがあり、且つまた地理學者が他學問の研究まで自由に利用するとすれば、次のような疑問が生じる。即ち部分的な研究が、實際上どの點で他學問の行う地域的研究と異なつて居るのだろうかという問題である。換言すれば、地理學者が地表を記述する場合、先ず部分的研究をするとして、その時に他の學問の研究者がするのと何か異なつた仕事をするかどうかということである。或はまた他學問の研究でも具體的な地域を取扱つたものは、すべて地理學的研究とするべきであろうか。そしてまた、前に述べた環境論的乃至地人相關論的研究でも、地域構造の研究でも、それ等が具體的な地域を取扱う限り、地表を記述する立場の地理學の部分的研究と看做して誤りではないであろうか。

要するに部分的研究の場合には、地理學固有の研究領域が判然としないということである。多數の部分的研究を利用して廣大な面積にわたる地表部分を記述する仕事になれば、これは明白に地理學上の勞作であつて他の何ものでもないと云えるものが出來る。然し部分的研究ではそれが判然としないのである。地理學の直接の對象となるものは空間的な存在であるすべてであるから、この點では全く區別されない。特殊の研究方法と云えば地圖化ということがあるが、部分的な研究に就いてはこれも絶對に必要と云えないのだから、この點でも區別できない。結局、部分的研究のみに就いて云えば、地理學固有の研究領域はないと云うことができるようである。しかも部分的研究ばかりが非常に多い現狀なのであるから、この事實は何か不安を感じさせる。地理學者を「何でも屋」と呼ぶ人があるが、その理由の重要な部分がここにあるのではなかろうか。

もちろん地理學的研究の領域がはつきりしようとしまいと、それだけでこれ等部分的研究の學問的價値が左右されるとは限らない。然し一般的に云つて、學問の分業における自己の持場をはつきりと認め、擔當する仕事を正確に行う研究が、最も大きな學問的價値を持つ成果を生むのではなかろうか。換言すれば、地理學が獨立の一學問であるなら、他學問と異なつた研究をすることが望ましいのではなかろうか。そこで私は、地理學の最も根本である分布という概念からも一度出直して、この點を考えてみたいと思う。

三　分布觀察の焦點に就いて

分布の觀察というのはいつたいどういうことであろうか。もちろん吾々は分布をありのままに觀察すべきであるが、無限の多樣性・複雜性・量を含む現實世界を、無心に唯々ありのままに取上げることは不可能である。是非とも選擇を行う必要がある。選擇した一部の現象の分布狀態を觀察して、その結果を文章・地圖・模型などの手段で記述する。從つて吾々が「諸現象の分布狀態」と云う場合、眞實には一般の現象の分布狀態を意味するのではなく、特定の選ばれた現象の分布狀態を意味するのである。そこでこの選擇の仕方が根本的に重要な問題になる。つまり觀察の焦點を何處に置くかの問題である。分布を觀察するということは、も少し細く云えば何處に分布するかという分布の空間的位置、どれ程分布するかという分布の量、分散的とか集中的とかその他の空間的分布の形態、諸現象の分布狀態

相互間の場所に關する關係、これ等の變化の速度などを見ることであるが、何を焦點にしてこれ等の諸點を觀察するかが問題である。

この焦點は、觀察者が豫めこれを定めて置かなくとも、現地の景觀に接する時に何か顯著な現象を感覺的に把えることができる。或は間接に地圖や文章や統計を見る場合にも、同樣に何か顯著なものに行當ることがある。これも重要なことであると思う。元來地理學は、事實をありのままに記述することによつて、演繹的な方法に伴う過誤を正したり防いだりすることを、その諸學問に對する寄與の重要な一部分とするものだから、無心に現實に當面して素直に現實を受取ることは大切である。成心を以つてする場合に或は見逃すかも知れない重要なことも、無心に觀察することによつて見逃さずに濟むかも知れないからである。

然し乍ら斯うした消極的態度だけでは、十分に深い觀察が行われないのではなかろうか。即ち觀察者は、學問上或は實際生活上の重要問題に關連して觀察の焦點を定め、そうした積極的態度を以つて觀察することもまた必要だと思う。自然及び人文の兩方面にわたる地理學全般については、この點に關して實質的に重要なことは何も云えない。唯〻人間の福祉の增大に關係ある事項を觀察することとか、地理的理想と呼びたいところの人間生活の理想の地理的側面、即ち人が居住地の如何に拘らず均等な生活水準を享受し得る狀態へ近接するための問題に關係するものを觀察することとか、を擧げ得るに過ぎないであろう。然し乍ら特殊の部門に就いての研究となれば、これらの焦點はもつとはつきりした特定のものになり、その意味も具體的になり得る。例えば經濟地理的研究の場合なら、經濟現象分布の位置・量・形態・變化速度などを觀察する場合、經濟の地理的側面の重要問題に關連して焦點を定めることができる。

この焦點はいくつもあり得るが、その中で次の五つを最も主要なものと考える。㈠即ち經濟現象の地域的集中㈡經濟の地域的專門化及び多角化、㈢經濟の地理的組織、㈣他地域の經濟との關係、㈤これ等の變化の狀態、である。これ等のうち地域的集中・專門化及び多角化に就いては、Edgar M. Hoover, The Location of Economic Activity. New York, 1948. の第五章第一七章その他及び Political and Economic Planning, Report on the Location of Industry. London, 1939. の第八章に殊に懇切に說かれて居るし、經濟の地理的組織に就いては Robert E. Dickinson, City Region and Regionalism. A Geographical Contribution to Human Ecology. London, 1947. から敎えられるところが多い。地域的集中は、それが經濟力の集中と結合する場合には殊に重大な諸問題を含み、地域的專門化は經濟の能率化を意味する可能性があることによつて、また地域的多角化は經濟の安定化を意味する可能性があることによつて、それぞれ重要である。地理的組織については、例えばディッキンスンが重視して居るように、諸種の機能を場所的に集中する結節點 Nodal point を中心として社會生活が行われる事實がある。一地域の經濟諸現象が相互に有機的組織をなすような分布狀態をなすか否かは、經濟全體に重要な關係を持つ。第四の他地域の經濟との關係というのは、諸地域相互間に地理的な有機的組織がどの程度にあるかの問題に關するものであつて、例えば物資の無駄な輸送があるかないかの問題の如きものを含む。第五の點に就いては說明を要しないと思うが、經濟現象の如きは變化の速度が早いから、この點の觀察はやはり重要である。

諸現象の分布狀態を觀察して地域的個性を記述するという主要な意味は、實のところこのような焦點に觀察を向けるということであろう思う。例えば何かの農作物が特に多產されるという特殊事情があつたとしても、それはそれ自體では無意味であろう。それが右に擧げたような焦點或はその他の何等かの觀察の焦點に關連して意味を持つ。即ちその農作物の生產に地域的集中があるか、專門化があるかなどに關連して意味を持つのである。

然し乍らここに殘る疑問は、この考え方が經濟地理學的研究を經濟學へ結びつけるけれども、地理學の他の部門との關係はどうなるかの問題である。經濟地理について以上に述べたことは、それと同樣なことが他の地理學部門のそれぞれに於いても行われるものとして述べたことはもちろんであるが、そうなるとすべての地理學部門がそれぞれ關係の深い地理學外の學問と結びつきが深くなるわけである。或る地域の自然及び社會的諸事情の全般を觀察した結果、その綜合的個性を求めようとするのが地理學的研究の目的であると考えるが、それは要するに地理學諸部門の研究を綜合することである。その綜合を行う場合に、各部門の研究が右のように地理學外の諸學問に結びつく性質のものであつても差支ないだろうか。私はこの點に對してまだ答えることができないが、この方法によつて各部門における觀察が深められるものとすれば、もちろん綜合の仕事を一層困難にする筈はないと、今のところ考えて居る。

唯〻その場合に問題になるのは、各部門の觀察の焦點のきめ方の間に、やはり何等かの統一が必要ではないだろうかということである。右に擧げた經濟地理的研究の場合の例は、經濟の地理的編成に關係して焦點をきめて居る。若しも他部門の研究が、環境論的乃至地人相關論的研究の見地から觀察の焦點をきめるもののみであつたら、果してこの二つの異なる方向の焦點から觀察された結果を綜合することに、困難が伴わないであろうか。少くとも、すべての部門で觀察の焦點を地理的編成に關してきめる場合に比して困難であると云えるであろう。

四　地域的個性記述の意義に就いて

以上述べて來たところから、私が地理的編成を地理學的研究の指導概念として認めて居ることが讀者諸賢には明かであろう。地理學の最も根本的な概念はもちろん地表に於ける空間的分布であるが、分布するものと他の分布するものとの關係に於いて分布がきまつて居ることを認める結果として、そしてまた諸現象の分布狀態が持續的・固定的である場合を普通のことと思う程である結果として、地理的編成の概念が容易に出て來る。（註二）

註二　私は地理的編成という言葉と共に、地域的構造・地理的組織・地理的構造などの言葉を、差別なく使つて居る。これ等の概念を嚴密に規定すれば、或は同意に用いては不可であるのかも知れないが、まだそれができない。要するに、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュが「地的統一」と呼び、川喜田氏が「地的均衡」と呼ぶところの狀態が生じて居るのは、地表に分布する諸現象の間に、組織があり構造があるものと看做すことができる狀態があるからだと考えるのである。

この立場から地域的個性の記述という仕事を見れば、それは各地域間の地理的編成においての、各地域の地位を示すという意義を持つものである。地域と云つても大小の單位がある。いくつかの小さな地域が夫々の個性を持ち乍ら結びついて地理的編成を持ち大きな地域を作る。その大きな地域がまた同じ單位の他の地域と地理的編成を持つて、更に大きな地域を作る。斯うして最後には全地表が地理的編成を持つことを考えるのである。この考え方は、少くとも經濟地理に關する限り、かなり實用的な含蓄を持つのであつて、例えば英國の Depressed areas 米國の Problem areas の如き考え方と密接に結びつくものである。わが國の地域開發計畫の立案及び實施も、或は市町村など行政區劃の變更の動きも、地理學界に少からぬ刺戟を與えて居ると思われる。

この考え方に對して、冒頭に述べたように地域的個性を環境に對する適應の結果と見る立場もある。その場合には、地域的個性記述の意義は、當然右に述べたところと異なる。然し「土地と人間との關係において、漠然たることを言つている地理學はすでに去つている」（渡邊氏前揭論文、七頁）と云う學者すらあるように、現在のわが國ではこの後者の立場は勢力を失いつつあるように見える。そして實社會の地理的編成の問題が重大化して居るのは、むしろ

わが國などおそかつた方で、外國では都市計畫や地方計畫或は國土計畫などに既にかなり前からのことである。然してこの傾向は決して一時的な流行ではないと思う。むしろ社會生活の地理的編成への意識的努力は、世界中に益々增大するように見える。これは社會生活に於ける計畫の增加という一般的傾向があつて、その地理的側面をなす現象なのではないかと思う。そしてこの地理的編成への意識的努力と最も密接な關係にある學問は、地表に於ける分布を最も根本的な概念とする地理學であるに相違ない。英國の地理學者ギルバートは、「地理學的調査の結果が、多くの國々の政治家達によつてまだ十分に利用されてないということは、不幸にも眞實である。にも拘らず、現行の區劃よりももつと緊密に自然的人口集團に合致する地域的境界を設定する途を用意するに當つて、二〇世紀の地理學者は價値ある仕事を行いつつある。この開拓者的な仕事の一つの結果として、地理的知識が社會及び國家によるサーヴィスに直接に應用され得るし、また兩者の生活を豐にするであろう」（Gilbert, op. cit., p. 370）と云つて居るが、地理學はその本來の課題である地表の記述に從事し乍ら、同時にまさしくこのような實用的價値のある成果を生むことができる筈である。（一九五三・一〇・三一）

巨視的動學理論における成長率の問題

鈴木諒一

一九三〇年代の經濟學が景氣變動論を中心課題としてゐたのに對して、一九四五年以降の經濟學の中心課題は成長率の問題に移行してきた感がある。ケインズの「一般理論」が發行され、不完全雇用の局面が理論經濟學の研究對象となつたことは確かに革命的發展であつた。しかし一九三〇年代の經濟學は不完全雇用からの脫却を專ら景氣對策と云う形で研究しようとした。ハイエクの「利潤、利子及び投資」は景氣循環の對策としての人爲的貨幣調節の方法を否定したものであるし、サムエルソンの「乘數と加速度の相互作用」は景氣循環の「型」の考察であり、カレッキーの研究も亦、計量經濟學的分析に「長期傾向的發展を除去した後においては」ケインズ型の理論が妥當することを論證しようとするものであつた。これ等の理論を elegant な形に美化して行かうとすれば「安定の條件」の理論が生れてくる。そこには單調に變動する短期理論の發展のみが見られ、長期における產業構造の變遷とか、實質國民所得の繼續的發展とか云う問題は、理論の背後に推し退けられる結果となる。サムエルソンの論文が「水平な軸を中心とする循環運動」であつたのは、まさにかゝる理由による。

然るに完全雇用の維持は一時的な景氣對策を以てしては不十分なことが解つてきた。長期に亙る stagnation の解決こそ生活水準を低下せしめずに雇用を增大せしめる基本方策である。そのためには短期的には不利に見えても結局